

幕末におけるキリスト教再伝来について

遠矢徹志

序

- 一 再伝来に関する研究及び史料
- 二 再伝来の発端
- 三 禁教時代伝道の苦心
- 四 最初の宣教師 C・M・ウィリアムズ
- 五 プロテスタント伝道と米・英両国ミッション
- 六 フルベッキ及びヘボンの活動
- 七 カトリックの再伝来
- 八 再伝来当時のカトリックとプロテスタント
- 九 幕末の会堂建設
- 一〇 キリスト教解禁の次第について
- 一一 再伝来当初布教の主力が米・英・仏であった理由
- 一二 キリスト教再伝来の影響
- 結び

序

十六世紀フランススコリザビエルに始まる日本へのキリスト

教伝来については由来明細な史料もあり、研究も行われて来たが、むしろ幕末、即ち十九世紀中頃のキリスト教再伝来について免角一般的にはなおざりにされがちである。というのは例えば高等学校日本史教科書を一見しても分る通り、幕末開港と共に漸次再伝来したキリスト教がやがて明治六年（一八七三年）キリスト教解禁となつて公然布教が始まり、それがやがて明治初期の思想・文化に大きな影響を与えたにもかかわらず、何も記されていないというのが普通である。

但し、勿論、キリスト教史学専門家にあつては相当詳細な研究や史料の調査も行われて居り、決して、おろそかにされているということではない。

私がここで記そうというのは幕末キリスト教再伝来のことについて、一応史学的立場からまとめて見ようとするのである。

註(1) キリスト教史学会「長崎大会紀要」(昭和四〇年七月)

一 再伝来に関する研究及び史料

幕末のキリスト教再伝来に関しては宗教家による著述はある

が、史学的意味の根本史料や考証的立場をもつものは少い。その中でここに注目しているのは小沢三郎氏の旧著「幕末明治耶蘇教史研究」⁽¹⁾である。これには幕末最初のプロテスタント受洗者清水某のことを清水宮内であらうとして野村書翰などにより実証したものがあり、彼とフルベッキ (Verbeck) との関係が記されている。又、フルベッキ自身の著書「History of Protestant Mission in Japan」⁽²⁾もあり、同志社の初期の外人教師フーネッド (Learned) の「キリスト教会史」もあり、まとまった著書としては山本秀煌の「日本基督教史」や「日本基督教史」がある。又比屋根安定氏の「日本宗教史」もあり、其他佐波直編の「植村正久と其の時代」⁽³⁾には単に植村正久だけのことでなく、この人の時代の様相や記録がよく収録されていて、これには多くの貴重な文献・史料を含んでいる。又、元田作之進著の「老監督ウィリアムズ」⁽⁴⁾は幕末再伝来の最初の宣教師の一人ウィリアムズ (C. M. Williams) について伝えた貴重な著書である。

次に断片的ではあるが史料として重要なものを含むのは明治初期以来、プロテスタントの牧師として活躍した植村正久の主催する福音新報で、しばしば再伝来初期の記録が示されて居り、又初期の宣教師の書翰類を収めたアメリカンボード (American Board) の記録、更に米國聖公会等の記録、The Spirit of Missions, Stock, Japan and Japan Mission of the Church Missionary Society などがある。

又、現、日本基督教団長崎教会には再伝来当初の古史料が火山戦前には保存されていた模様であるが、今次大戦のとき、某

長老方に疎開させたところ、疎開先で戦禍にかかって失われ、今わずかにその一部が福岡県柳川町の現、日本基督教会柳川教会に保存されているときいている。

カトリックの再伝来に関する記録は割に多く保存され、又史学的にも正確な著述が多い。当時の史料はその頃の宣教師の書翰其他の文書がパリミッション年次報告(特に一九世紀のもの)にくわしく収録され、朝鮮・琉球・奄美・大島の伝道開始についてもくわしく記録されている。著述については片岡弥吉氏の「浦上史概説」があり、浦川和三郎氏の「浦上切支丹史」、田北耕也氏の「かくれ切支丹」などがあつて、カトリックの再伝来、「かくれ切支丹」との関係などが明らかにされている。

註(1) 小沢三郎著「幕末明治耶蘇教史研究」(昭和十九年、亜細亜書房刊)

(2) 佐波直編「植村正久とその時代」(昭和十二年、教文館刊)

(3) 元田作之進著「老監督ウィリアムズ」この外、アメリカに保存された史料は、Stephen millis Ryder, Ph.D.: A Historical Sourcebook of the Japan Mission of the Reformed Church in America (1859—1930), The York Printing Co. 1935 G 中の巻末に詳しく記されている。

(4) わが国最初の伝道者の一人であり、現、日本基督教団富士見町教会の創設者である植村正久が創刊したもので、主として、プロテスタント再伝来以降の貴重な記録がし

ばは具体的に記されている。

- (5) 本書は一九六〇年版があり、上智大学にも保存されている。
- (6) 前掲書及び特に奄美大島伝道については鹿児島県のサビエル教会内に日記があり、私自身も「明治以後の鹿児島県キリスト教」(鹿児島県社会科教育研究会刊)中に記したこともある。
- (7) いづれも史料にもとづき、詳しく記されている。

二 再伝来の発端

先づプロテスタント伝来のことから記すこととする。American Board の機関紙ミッショナリー・ヘラルド(The Missionary Herald, 1828)によればマサチューセッツ州(Massachusetts)ブルックライン(Brookline)からの献金二七ドル八七セントが一八二八年日本伝道のために受領されたことが記されて居り、そのころボストンの実業家ウィリアム・ロープス(William Robbins)は月一回の家庭集会で日本伝道のために献金が集められたと伝えられている。そして、その時の献金の簿は美しい日本製のものだったという。初めは一五ドル程度であったが次第にふえて、遂に四一〇〇ドルにもなったが、これはアメリカンボードへ送られて日本伝道の基金となったといわれる。然し、アメリカンボードが正式に日本伝道を決議したのははるか後年の一八六九年のこと、それにより渡来した最初の宣教師はグリーン(D. C. Green)であった。彼の父はボストンのロープスの

集会に出た一人であった。

これより先、米国の Protestant Episcopal Church(聖公会)のリギンス(J. Liggins)とウィリアムズ(C. M. Williams)は一八五九年(安政七年)始めて長崎に渡来、これが、キリスト教再伝来の発端となったものである。ペリーが浦賀に來航してから六年後のことであった。リギンスは五月、ウィリアムズは六月來航、つづいて同年十月米国長老教会(Presbyterian Church)のヘボン(J. C. Hepburn)夫妻が神奈川に來航、十一月には米国オランダ系改革派教会(Reformed Church)のブラウン(S. R. Brown)とシモンズ(D. B. Simmons)も來朝、そして少しくれて長崎へ同教派のフルベッキ(J. F. Verbeck)が渡来、翌一八六〇年(万延元年)には米国バプティスト派(Baptist)のゴープル夫妻(J. Goble)が神奈川へ來航、一八六一(文久元)年末米国改革派教会のバラ夫妻(J. E. Ballagh)も神奈川に來航、又一八六三年には長老派のタムソン(D. Thompson)夫妻も神奈川に來航、かくて、プロテスタントによるキリスト教の伝道が開始されたものである。

これより先、嘉永六年(一八五三年)六月ペリーが初めて浦賀に來航したとき、同年七月十日最初の日曜日にあつたのでペリーらは米艦モリソン号甲板で聖公会のウィリアムス司祭により公の礼拝を行った。これが、記録に残る日本最初の礼拝で、旧約聖書詩篇一〇〇篇が読まれ、現行讃美歌四番(古今聖歌集三四八番)がうたわれた。即ち、「よろづの国びとわが主にむかいてこころのかぎりによりこびたかえよ……」の歌でその後

八月一日の日曜日にもボウハタン・ミッシンビ号兩艦下にて礼拝がもたれた。そして、現讃美歌二一六番「ああうるわしきシオンのあざ、ひかりを照りそめける。やみにまようくにぐにも、あやまにいわかし。……」などがうたわれたという。

註(一) The Missionary Herald, 1828, American Board Learned の「基督教会史」

- (2) The First Protestant Missionary Collection for Japan, Bennett.
- (3) 比屋根安定「日本宗教史」其他
- (4) ペリー「日本遠征記」
- (5) 元田作之進「老監督ウィリアムズ」

三 禁教時代伝道の苦心

カトリックの再伝来については後述することとし、ここでは一応プロテスタント伝来初期の伝道の苦心について記すこととする。C・Mウィリアムズは長崎に上陸当初、広徳庵に居住した後、リギンスと共に崇福寺内に居住した。特に、ウィリアムズは日本語の修得につとめ、聖書・祈禱書の訳をなし、使徒信経・十戒・主禱文・小児のための小冊子と訳につとめた。彼は当時の志士高杉晋作らにも会い、又、大徳寺内に居住したフルベッキにも会った。而して、始めは長崎居留の外人のため礼拝式を行つたが、やがて、日本人にも密かに、キリスト教を説いた。彼は漢方医笠戸順節より日本語を学び、或は本を借りた。彼は数学にも秀でていたので、大隈重信にも数学を教えた。禁教時

代最初の受洗者といわれる肥後の武士庄村助右衛門に一八六六年(慶応二年)バプティスマを授けた人でもあった。庄村はその後投獄され、後に獄死し、プロテスタント最初の殉教者ともなった。又、フルベッキは来朝以来、甚だ多面的に活動した人であるが、前記のように、大徳寺に住し大隈重信・副島種臣らを中心とする致遠館で、聖書・米國連邦志などを教えた。一八六六年、彼は大徳寺内の私室で、密かに村田若狭・弟綾部・本野某に洗礼を授けた。彼は主として英語を教える傍ら、キリスト教を伝え、幕末・明治維新の活動家伊藤博文・井上馨・西郷隆盛・後藤象次郎らにも影響を与えた。後、フルベッキは東京へでて、開成学校教師となり、又、文部省顧問として活躍した。

神奈川へ來航したヘボンは宣教師であり、医師でもあったが、特に日本語に熟達、ヘボン式ローマ字をつくり、又、和英辭書をつくった。而して、聖書の訳にもつとめ、初めに、マルコ伝・ヨハネ伝を訳した。彼は当初、成仏寺に居住したが、後、病院をつくり、又塾をつくった。その夫人はフェリス女学校の前身を建て、彼自身は明治学院の創立に関係した。禁教時代は非公式に或は医療をなしつつ、或は英語を教えつつ伝道したのである。

註(一)「基督教週報」二二卷第二〇号山辺久吉氏。「キリスト教史学会」長崎大会紀要「C・Mウィリアムズについて」伊沢平八郎。「崇福寺雜誌」(昭和三十六年)、崇福寺史料にある記録では広徳庵も崇福寺内に在ったとなつてゐる。現在の同寺うしろの墓地(外人墓地)付近かと思わ

れる。

- (2) 「基督教週報」第二三卷第六号、小沢三郎著「幕末明治耶教史研究」
- (3) フルベッキの事蹟については「福音週報」明治三十一年三月号、外、「日本評論」「東京帝大五〇年史」文部省編「日本教育史略」「太陽」第一巻第七号等に詳述され、又、彼自身の著、前掲「History of Protestant Mission in Japan」にもあり、山本秀雄著「日本基督教史」、比屋根安定著「日本宗教史」などにも記され、最近では高谷道男氏が「キリスト教史学会長崎大会紀要」(昭和四〇年)にも論述している。又、現、長崎外語短期大学長、青山武雄氏らも若干の史料を収集して居られる。又、佐波宣編「植村正久とその時代」第一巻にも所載さる。
- (4) M. Kidder 女史がうけつぎ、現、フェリス女学院として発展した。
- (5) <ボンの記録にひつては W. E. Griffiths の「<ボン伝」(Hepburn of Japan) にくわしく、彼自身の述作も多い。

四 最初の宣教師 C・M・ウィリアムズ

幕末プロテスタント伝来については米国聖公会 (Protestant Episcopal Church) に属するリギンスが (John Liggins) 一八五九年(安政六年)五月二日長崎に來り、つづいて同教派ウィリアムズ (Channing Moore Williams) 一八五九年六月末、長崎に來航、日本宣教の先駆となった。リギンスはその後、病氣

のため翌年帰国、ウィリアムズは長年日本に居住し、宣教につとめ、一九〇八年(明治四十一年)四月帰国した。ウィリアムズは前記のように、主禱文・十戒・使徒信經・マタイ伝などを訳し、一八六一年(文久元年)初めてできた長崎の新教派教会の牧師となった。この教会は戦前まで存したが、戦災で失われ、明治七年出島にできた教会は戦禍をまぬかれ、現存するが、この教会は今、朝友病院に使用され、現会堂とは別のものである。⁽¹⁾初めウィリアムズは長崎の禪寺、崇福寺内広徳庵に住み、英語を日本人に教えつつ伝道したが、一八七一年兼任のモリス (Morris) と共に大阪へ移り、英和学をたてて英語を教えた。

ウィリアムズが去つてからは長崎では主に英国教会 (Church Mission Society—C. M. S.) が中心となって伝道した。大阪へ移つたウィリアムズは日本の女子教育の弱さを知り、一八七九年照暗女学校を大阪に建てたが、これは後、京都に移り、現にある平安女学院となった。彼は日本に在る多くの外人宣教師が、それぞれの本国の教派に属し、まちまちの伝道をしていたので、彼の属する教派を少くも統一しようとし、英国教会 (Anglican Church) 系にても合同統一することに成功した。即ち、米国系 (Protestant Episcopal Church) と英国系の Church Mission Society, Society for Propagation of Gospel を合同し、所謂、日本聖公会として統一されることとなった。彼は又、学校経営の方でも、前記、大阪英和学舎・照暗女学校(後の平安女学院)の外、やがて東京へ出て立教学院の設立にも尽力した。彼は極めて地道な伝道活動をしたので、初期の苦難の多い開拓伝

道であつたにもかかわらず、あまり、世人に知られず、自ら「道を伝えて己を伝えず」となし、「右の手のしていることを左の手に知らせるな」(マタイ伝六の二三)のキリストの教えの通り、謙譲・陰徳の人であつた。明治時代を中心に日本人伝道者として大活躍をした植村正久は福音新報八〇六号の中で次のように評している。「氏は謙譲の人にして、右の手もてなせることを左の手にも知らせざらんとする如き陰徳を主義とせり。克己堅忍にして、溫柔寡言なりき。監督(主教)の榮職に在りと雖も身を持する極めて素衣粗食に安んじ、貯ふるところの金を以て、公共のために散じ、奇行頗る多く、稀に見るべき性格を有したり。至誠、人に迫り、祈禱に力ありし人にて、古聖徒の面影を留めたりき」。

彼の非常に熱心な力のある祈りに感動する者が多かったといわれる。かつて、奥野昌綱という人、聖公会の祈禱書による祈禱がきらいであつたが、或るときウィリアムズは彼の前で滄海と祈つた。椅子をはなれ、ひざまづき、敬虔な語気で祈つた。奥野もつづいて祈つた。そのとき、奥野は今日程貴方の祈りに感じたことはないといった。ところでウィリアムズは只一言、貴方が形式的だと非難されるその「祈禱書」によつて、私の言葉で祈つただけだと答えた。以来、彼は聖公会祈禱書を尊重し、公私祈禱の模範として大切にすることになったといふ。

彼は明治四一年(一九〇八)七十九歳のとき、飄然として日本を去つたが、その親しい友人さえにも知らせなかつたといふ。彼は帰米の後、ヴァージニア州リッチモンドの郷里で一九一〇

年(明治四十三年)十二月二日永眠したが、その地にすでに知人なく、その墓も墓標さえなく、日本開教の主教であつたとも知られずいたが、一九一三年十一月リッチモンド市ハリウッドに日本宣教の後継者であつたマキム、タッカー両主教や小林彦五郎らにより墓標が建立され、左の如き碑文が記された。

In loving memory of the right reverend Channing Moore Williams, D. D. who consecrated his life to the Japanese people as Missionary and Bishop from July 1859 to April 1908, This tablet is elected by Japanese Christians

又、邦文で、

創業の難を排し、堅忍能く日本聖公会の基を尊む。嗚呼我が老監督ウィリアムズ、美哉。日本在住五十年、道を伝えて己を伝えず。一朝飄然として去り、老骨を故山に埋む。温容往焉、追憶日に新なるものあり。茲に碑を老婦就眠の地に建て、日夕愛慕の意を表す。

大正二年七月 日本聖公会有志者

とある。

英文はタッカー主教の撰、ガーディナー師筆。邦文は山縣雄杜三郎撰、立教大学長元田作之進師書である。⁽³⁾

註(1) 長崎教会長老青山武雄氏による。

(2) 元田作之進著「老監督ウィリアムズ」

(3) 海老沢有道氏「ウィリアムズ主教銅像除幕に寄せて」による。

五 プロテスタント伝道と米・英両国ミッション

日本のプロテスタント伝道の発端をつくったのは前記のように一八二八年アメリカのブルックラインからの献金とW・ロープスの献金であったように記録されているが、これはアメリカンボードミッションの日本伝道活動の始まりと思われる。又、実際に最初に日本に来航し、伝道を行ったのは一八五九年長崎来航のリギンスとC・M・ウィリアムズで彼らはいずれも米國聖公会 (Protestant Episcopal Church) に属する人達であった。又、同年少しおくれでヘボンも米國 Presbyterian Church (長老教会——日本では日本基督教会として成長) に属し、ブラウン、シモンズ、フルベッキは米國オランダ系改革派教会 (Dutch Reformed Church)——(日本では後、日本基督教会に合流) に属し、一八六〇年来航のゴープルは米國バプテスト教会 (Free Methodist Mission Board) に属し、一八六九年来航のグリーンは前記、アメリカンボードミッション (日本では組合教会) の人であった。従って、日本開港から米國によって始まったように、プロテスタント伝道も亦、米國がその始めをなしたのである。英國のミッションの活動はこれにつづいたもので、一八六九年長崎へ来航したエンソル (George Ensor) は英「國聖公会 (The Church Mission) 」に属する人であった。一八七一年には米國婦人一致異邦国伝道協会 (Woman's Union Missionary Society of America) からM・フライン、L・H・ピアソン、J・N・クロスビーら婦人宣教師が来日、日本の婦人伝道

の力となった。其他、ヘボン夫人タムソン夫人など女子教育に関係し、活動した人達もあった。⁽¹⁾

註(1) 小沢三郎「日本プロテスタント史研究」(一九六四年刊)

六 フルベッキ及びヘボンの活動

幕末禁教時代からプロテスタン伝道に活躍し、宣教に大きな力をあらわしたのはフルベッキとヘボンであった。

フルベッキについては前記のように彼自身の著 G. F. Verbeek, History of Protestant Mission in Japan があり、福音新報 (明治三二)・日本評論・東京帝國大学五十年史、又、文部省編「日本教育史略」、「太陽」第一巻の七号などに詳記されているのでここに再記するまでもないが、一八五九年一月長崎に来航、リギンスやC・M・ウィリアムズらと共に始め崇福寺に居住したが、のち大徳寺に移り、長崎を中心に九州各地を巡って伝道した。但し、幕末禁教時代は大休長崎にいて、英語塾をひらいて英語を日本人に教えながら自らも日本語を勉強した。彼はオランダ生れの米人で、来朝以来終生日本で過した人であった。始め、工学を修めたが、後信仰を得て、ニューヨーク州オーバン神学校を卒業した。長崎で信望を得幕府に認められて長崎府洋学局で英語を教えたが、前記のように佐賀藩設置の致遠館でも教授した。明治政府の要人で彼の影響を受けた者が多かったのも既述の通りである。彼が公然活動し、キリスト教会伝道の傍ら、明治政府をたすけたのは勿論明治六年キリスト教解禁後のことであった。彼も亦、聖書反訳につとめ、又、明治

学院神学校でも教鞭をとった。彼は晩年すべての職を辞任し、専ら巡回伝道に従事した。よく日本語を解し、能弁で、幾平の聴衆を感歎せしめたという。京浜間は勿論、日本国中を巡り、足跡至らざるところなしといわれた。⁽¹⁾

ヘボンは一八五九年 (安政六年) 十月神奈川に来航、フルベッキと共にその活動めざましく、従ってその記録も多く、自らも著述し、又日本語も深く理解し、和英辞典及び英和辞典を編し、又、いわゆるヘボン式ローマ字をつくり、ヘボン塾をつくって、英語を日本人に教えながら、伝道した。彼はペンシルバニア大学の出身であるが、神学を学ぶと共に医学を学んだ。従って、宣教師であると共に医者であり、又、中国語・日本語を学び、幕末から明治初期に特に日本人に与えた影響は大きかった。神奈川上陸当初今も残る成仏寺に住み、約半月おくれに来航したブラウンと同居した。聖書のマルコ伝とヨハネ伝を和訳し、後バラヤタムソンらとも共同で、マタイ伝を訳した。かくて、日本人に英語を教えると共に聖書を教え、キリスト教を伝道した。幕末には尚、排外的な日本人が多く、彼の仕事はしばしば妨害され、一時中止したことさえあった。彼は医者でもあったから病人の治療をなし、その西洋医学がすぐれた実効を示したため非常な人気をかくし、ひろく同地方の人々に知られることとなった。横浜にヘボン治療所とヘボン塾ができてからはそこで治療と伝道と教育とに従事した。ヘボンは米國プレズビテリアンミッション (Presbyterian Mission) に属し、夫人と共に来朝したのであるが、ヘボン夫人も教育家で、後年政治家

として活躍した高橋是清らを女兒と共に教えたが、女生徒はやがてキダーという婦人宣教師が引きつぎ、これは後のフェリス女学院として成長した。

ヘボンについては W. E. Griffiths の Hephurn of Japan に詳記あり、又植村正久の記せる福音新報第一〇二五号一三三号等に記されている。又、明治学院五十年史にもその教育関係のことが多く記されている。

註(1) 「福音新報」(明治三十一年)

七 カトリックの再伝来

一五四九年 (天文一八年) 始めて、フランシスコ・コリザビエル (Francisco de Xavier) によって伝えられた日本のキリスト教はローマカトリックであったが、これはやがて、禁教となり、島原の乱 (一六三七—一六三八) 後は遂に完全な鎖国となり、日本からキリスト教は消滅されたかに思われた。然るに実際には日本各地にいわゆる「かくれ切支丹」となって残存、かつて、最も盛んであった北九州地方、殊に、長崎・平戸・五島方面に多く残り、表面仏教徒をよそおいつつ、仏壇には「マリア観音」を安置し、深夜、相集まって集會し、礼拝し、子々孫々キリスト教を伝えた者も少くなかった。然るに、幕末、再開港となつて、一八五八年 (安政五年) フランスと通商条約が成立すると共にフランスからジラル (Girard) が来口し、一八六二年 (文久二年) には横浜に天主堂ができて、ジラルはローマ教皇ピウス九世により、日本教区長に任命された。又、一八六三年 (文

久三年)には同じくフランスからプチジャン (Petitjean) が長崎に来航、大浦に会堂が建てられた。是らの会堂は勿論、当時来日の外人のためのものであったが、一八六五年(慶応元年)三月、プチジャンはそのころ来日のフェウレと共に始めて「かくれ切支丹」の存在を発見した。即ち、この年、二月会堂の献堂式が行われたが、その一か月後、三月十七日(金曜日)の午後、一四、五名の日本人男女が会堂に来て、彼らは中に入っただけで、ひざまづいた。而して彼らはプチジャンに浦上の者で「かくれ切支丹」であることを告げ、ここに始めて、日本の久しきに亘るキリスト者受難の中にも、尚、信仰を守りつづけて来た者のあることが分り、プチジャンは大いに喜び、直ちにフランスミッションへこの事情を報じ、連絡したものである。日本のカトリックの再伝道はこれらの「かくれ切支丹」との深いかわりの下、ひろげられたものである。

「かくれ切支丹」発見の事情については一九世紀バミッシュン年次報告(一九六〇年版あり)に詳しく記録されて居り、又浦川和郎氏著「浦上切支丹史」にも詳述されている。プチジャンを主とする宣教師は未だ禁教中なのでひそかに浦上の彼らの部落をおとずれ、遂に彼らとの連絡に成功した。然し、長年の間の孤立化に、ローマカトリックの純粋な形がやや変形はしていたが、大切な洗礼などの礼典が「水方」と称する家があり、之れを伝え行っていたし、彼らとなえた祈禱も内容的にはあまり変わってはいなかった。一八七三年(明治六年)キリスト教解禁に伴い、「かくれ切支丹」は概ねカトリックに公然と

どり、殊に浦上方面の彼らは相協力して壮大な天主堂を浦上に建設した。これが完成したのははるか後年のことで、一八八〇年以降一九一四年に至ってで上がった。然し、遺憾ながら、この聖堂は昭和二〇年(一九四五年)の大空襲で原爆により完全に失われ、現在の聖堂は戦後再建のものである。

カトリックの再建は主に長崎地方から始まり、関東では横浜、九州の南端奄美大島にも伝道が行われた。特に奄美大島の伝道については筆者が戦後九州在住中、鹿児島市の聖サビエル教会に保存される日記により、迫害の中に伝道された事情を一部収録している。

長崎を中心に日本の伝道に尽したプチジャンは一八六八年九月、「聖教初学要理」を編纂、その後も一八七四年までおよそ二十数種の「教理書」や「信心書」が出版された。禁教時代幕府により、時浦上の約三千人の「かくれ切支丹」がとらえられ、諸藩に分散されて預けられたが、解禁と共に彼らは解放せられた。かくて、日本のカトリック教会は「かくれ切支丹」の復帰と共に新しく伝道が始まり、一八七六年(明治九年)北教区と南教区とに分けられ、特に、ジラルは南教区長として活動、又大阪にも移り、関西方面の伝道も行われた。

註(1) 拙稿「鹿児島島の基督教」鹿児島県社会科教育研究会刊。
(2) 「長崎大会紀要」キリスト教史学会昭和四〇年七月号。

八 再伝来当時のカトリックとプロテスタント

日本にキリスト教が再伝来した一八五〇年代は世界的には英

国につづいてフランス・アメリカが東洋進出をした頃で、それらの国々は資本主義経済が大きく発展し、世界市場を求めつつあるときであった。従って、これにともない、それらの国々が積極的にキリスト教国外伝道についても熱心で、カトリックはフランスミッションによって行われ、プロテスタントはアメリカが主力であり、イギリスがこれにつづいた。どちらかと云えば、プロテスタントの活動が活潑であったのは資本主義経済の発達の際に沿っていたことと、都市が中心となり、而も下向き

人として代表された武士にキリスト教信仰をつぎ込むことにより、彼らをして活潑に、そして自主的に日本人自身による伝道を行わしめる方向をたどったからである。彼らはたしかに明治初期に至るまで、キリスト教伝道の上でも活動し、明治以後は旧武士が中心になってプロテスタント伝道に活動したものである。即ち、本多庸一・井深梶之助・植村正久らがそれである。又、九州のいわゆる熊本バンドから現れた海老名弾正・小崎弘道ら北海道のクラーク門下から出た内村鑑三・新渡戸稲造らもよく知られるところである。これより先、上州安中藩士新島襄は幕末にひそかに渡米、キリスト教信者となり、帰国後、同志社を京都にたててキリスト教教育に尽した。彼らの活動は幕末につづく明治初期のキリスト教伝道に力があつただけでなく、明治の思想・文化の上に大きな影響を与えたことはいまでも

ない。

カトリック伝道の場合は一六世紀以来の伝道の影響もあって、

再伝来に際しても、「かくれ切支丹」の迫害、大島伝道の迫害などあり、困難の中に組織的に伝道が行われ、信教自由となっても武士達よりもむしろ多くは長崎地方の漁業や農業従事者など比較的下層の働く人達の間にひろまった。どちらかといえば、前記のように、プロテスタントの人達が社会的には主勢力になったことは見逃せない事実であった。

九 幕末の会堂建設

先づ、カトリックの方から記すが、一八六三年(文久三年)当時の外人のため、長崎の大浦の天主堂の建設が始まり、一八六五年(慶応元年)二月、完成した。「かくれ切支丹」が参堂し、発見されたのはこのときのことと、この会堂はゴシック風に建てられ現存している。同じ頃、横浜でも会堂が建てられ、これは外人居留地にあったが、現在は山手町に移された。

プロテスタントの側では、先づ一八六一年に長崎の出島に聖公会のウィリアムズによって建てられたが、現在は既に失われ、明治七年改築のものも今は使用されず、出島の現在の聖公会会堂は更にその後でできたものである。尚、ジェンズ(Jones)らによって別に一八六六年長崎教会の会堂(現、日本基督教団長崎教会であるが、現在のものは当初のものではない)が建てられた。一方、横浜では一八六一年、バラの下に集った人々を中心にプロテスタントの教会堂が建てられたが、これも現存せず、現在の横浜海岸教会は一九三三年(昭和八年)建設のものである。

会堂建設については別の機会に記すこととしたい。
 註(1) 長崎教会の青山武雄氏調査による。現、東京銀座教会の鐘は当初のものであるといわれている。

一〇 キリスト教解禁の次第について

長年に亘る江戸時代のキリスト教の禁教令は一八七三年(明治六年)二月に至り、漸く解禁となったが、以下その次第について略説する。前記のように、禁教時代にも「かくれ切支丹」として、我が国には根強くキリスト教信仰は依然として残ったが、たまたま一八六五年二月、長崎の大浦天主堂献堂式の後、この会堂に十数名の者が来て、宣教師ブチジャンに浦上の者で伝承のキリスト信者であることを告げ、会堂に入り、ひざまづいた。これが外人宣教師による「かくれ切支丹」発見の始まりで、その後、復活節に千五百名程の信徒が浦上より来て、この新会堂にて礼拝した。その後、これは幕吏の知るところとなり、長崎附近の村落を搜索して、数千人のかくれ切支丹が発見された。即ち、彼らは幕府の嚴重な禁令を犯し、密に祖先のキリスト教信仰をうけつぎ、「水方」と称するバプテスマ執行者もあつてキリスト教信仰はつづけられていた。長崎奉行所は一八六七年三月、彼らを呼出し、嚴重に取調べた上、六十余人を投獄した。当時の入牢者名簿は長崎図書館に保存されている。

このことは忽ち、外交問題となり、ブチジャンは各国領事を訪問して事情をうったえ、各国外交官の物議をかますこととな

った。フランス領事レック(Jeques)は奉行所に抗議した。

浦上和三郎氏の「浦上切支丹史」には「かくれ切支丹」に対する幕吏のはげしい取扱ひに關して委細に記されている。このようなことは人道上許せないこととして、当時長崎に來あわせたアメリカ公使バルケンブル(Valkenburgh)もこの問題の解決に協力した。又、フランスのロシュ公使も活動したが、最も強力に活動したのはブチジャンで、対幕交渉を始めたものである。その結果、結局、表面上、改信という形で、それらの信徒は放免されることとなった。

然るにその後、一八六八年(明治元年)徳川幕府は倒れ、明治政府となつて、新政府も尚キリスト教禁教の方針を変えず、諸藩に対し沙汰書を出し、「切支丹邪宗門之儀は是迄御禁制の通固可相守事」と伝え、再び、浦上の切支丹を迫害した。これに対し、諸外国公使は抗議書を政府に提出、信徒の解放を迫った。一八七〇年(明治三年)漸く浦上切支丹は放免されたが、真にキリスト教禁制の高札が撤去されたのは一八七三年(明治六年)のことであつた。

一八七一年一〇月、岩倉具視が特命全權大使となり、木戸孝允・大久保利通らを随員として、欧米諸国を歴訪した際、キリスト教禁止の非を悟り、殊に条約改正問題との関連もあつてその帰国に際し、遂に禁制を解くに至つたものである。これは前記通り、一八七三年であつたが、真に信教の自由が公認されたのは明治憲法制定によるもので、それまではとく問題をおこすことが少くなつたのであつた。

キリスト教解禁についてはフランスの宣教師ブチジャン(カトリックの日本南教区司教)が中心となつて最も活動したが、イギリス公使パークスも外交問題としてとり上げ、活躍したものである。而して、真の信教の自由を得るまではプロテスタントの側でも受難者相つぐ状態に既に、一八六九年(明治二年)小島一騰は長崎で聖公会のG・エンソル(G. Ensol)から受洗し、翌年捕えられ、三年間在獄、一八六八年(明治元年)ノルベッキから受洗した清水宮内はこれも翌年捕えられ、一八七二年まで在獄、一八八六年(明治十九年)磐城国小学校教員山田保禄はキリスト者なる故に改宗をその校長に迫られ、拒否したため、遂に解職されたという事件もあつた。

然し、一応表面上、法的にも公式にキリスト教が信仰自由を得たのは前記のように憲法制定以降であつた。

註(1) 浦川和三郎「浦上切支丹史」

- (2) 同右
- (3) 太政官布告
- (4) 前掲「浦上切支丹史」
- (5) 太政官布告
- (6) 小沢三郎「日本プロテスタント史研究」

一一 再伝来当初布教の主力が

米・英・仏であつた理由

プロテスタントの場合は何としてもアメリカが日本開國の口火を切つた外交事情に伴うもので、これに従つて、アメリカ宣

教師が盛んに來日、つづいてイギリスミッションから宣教師が來航したものであつた。

又、カトリック布教についてフランスが中心となつたのは、丁度その頃東洋伝道がフランスミッションにまかされてゐたためであつた。即ち、パリ外国宣教会のジラル(Girard)が先づ日本教区長を命ぜられ、つづいてフェーレ(Férel)ブチジャン(Potieau)が來航、会堂建設、「かくれ切支丹」の発見などとなり盛んな再布教が始まつたものである。

一二 キリスト教再伝来の影響

一九世紀中頃、我が国にキリスト教が再伝來した頃のヨーロッパ諸国は漸く資本主義が発達し、世界市場の拡大をめざしつゝあつたときであり、列國の世界政策が帝國主義化しつゝあるときであつた。このなかで、資本主義の發展とともに発達しつゝあつたプロテスタント派キリスト教は都市が中心になつて布教されて行き、従つて、わが国に再伝來のときも先づ、長崎や横浜、つづいて大阪・京都・東京とひろがつたことは世界的なプロテスタントの發展の行きかたと大体同じであつたことも首肯できる。而して、特に日本の場合には勢力の没落しつゝあつた武士の間にひろまり、当時としては知識人であり、語學に關心を有し、且つ、新しい知識・思想へのあこがれを感じた人達であつたので、何よりも先にこれらの人達にキリスト教が受入れられた事情も理解できるものである。又、カトリックの方では「かくれ切支丹」の発見が有力に影響して、長崎を中心に迫害

の中で再建への道がひらかれ、次第に布教の困難性を克服して、遂にキリスト教解禁に至り、カトリックは主として「かくれ切支丹」が潜伏した下層社会・田舎の人達にひろめられ、同じ長崎でも漁民や農民、又、九州でも奄美大島のような僻地にひろまり、やがて各階層、又都市への伝道と化したものである。

いづれにしても、久しい間の鎖国で、世界の文化・思想の進展からとざされていた日本人に新しく世界的な思想の中に最初にふれさせられたのがキリスト教であったことは見逃せない事実であった。従って、明治初期の開国進取の気運の中で、キリスト教が中心の勢力となっていたもので、免角、高等学校教科書などで、自由民権思想のみが大きくとり上げられ、その最初のきっかけとなったキリスト教再伝来が見失われようとしているのは遺憾である。自由民権の人達の多くは最初にキリスト教の影響のあつた人達であつた。従って、キリスト教は政治的方面への影響も見逃せないし、又、初期明治文化の進展の上に大きな影響を与えたものであることに注目したいものである。

結 び

以上述ぶるところ、概ね、既存の史料により、まとめたものであるが、今後、幕末伝来当初の史料、又、外国にも保存されている幾多の史料につき十分の検討すれば、更に新しい史的理解をも生ずるのではないかとということが考えられ、新史料の十分な検討・分析が今後更に必要なことであらう。

与えられたわづかな期間のなかで、今回はこの程度の報告に

と定めることとしたい。

(以上)